

「この人は大工の子ではないか。母はマリヤと
いい、兄弟たちは、ヤコブ・ヨセフ・シモン
・ユダではないか。またその姉妹たちもみな、
わたしたちと一緒にいるではないか。」

(マタイ福音書 13章55節)

これは、イエスさまが、ご自分の育ったナザレ村に行かれたとき、村人たちがイエスさまについて語り思った言葉であります。

村人たちは、ただ素直にイエスさまを見ることができませんでした。素直に見るとは、生地きぢ、下地そのままに、ということでもあります。つまりイエスさまを素直に見るとは、イエスさまがどの、だれの子であるとか、どんなかたがきをもっているとか、どんなかおをしているとか……などの外見的、この世的なことに止まり、それに捉われずに、つまり、自分の目、考え、耳、鼻……などに捉われずに、イエスさまそのもの、イエスさまをして、イエスさまたらしめているイエスさまの生地きぢ・下地そのものを、そのままに受けることなのであります。それ故に素も直も、そのものまこと(眞実、誠)という意味をもっています。このことを、イエスさまの言葉にそくして申しますならば、心を貧しくすること(マタイ5・3)であり、心を清く

すること（マタイ5・8）であります。そのとき人は、天国（神のおめぐみ）を見、神そのものの真実を見ることができるのであります。（マタイ5・3。5・8。）

わたしたちは、自分をもつ偏見のゆえに、その人の偉大さが全く見え、理解できない場合があります。後になって、「あの時もっと素直に聞き、見ておけばよかった」と悔いることがあります。ナザレ村の人々は結局イエスさまを目の前にしつつ、ついにイエスさまにお会いすることなく終ってしまつたのであります。ですから、パウロはキリストを肉において知るまい、見るまいと告白したのです。（コリント第II 5・16）
今深く自分をかえりみるものです。

36

「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」

（ロマ人への手紙 10章17節）

人が自分の考えや思いについて語ることは、それは、その人の思想・哲学・観念を語ることであつて、決して信仰を語つたことにはなりません。

また人が自分の信念にもとづいて生きることは、その人の道徳や倫理を生きることであつて、

決して信仰を生きたことにはなりません。

信仰は、自分の考えや思いとは別に、自分以外の（人以外の）まことなるものからまことなることばを聞くことであります。「聞く」とは、受けること、したがう、という意味がありますが、まことなることばを、自分を素直にして、ただ受け、したがうこと、これが信仰なのであります。

それ故に「信仰は聞くことによる」のであります。しかし、まことなるもののまことを聞くと言っても、くもをつかむようなことでありますが、それは、まことを生きた者の言葉と行いによって、たしかにわたしたちは見ることが出来、聞くことが出来るのであります。

聞くとは、語られし言葉のころ、または語られし者のころを聞き受けることであって、決して、語られた言葉の一字一句に囚とらわれることではありません。いいかえると、聞くとは、語られし言葉によって出て来た、まことを聞き受けるということであり、聞くとはキリストの言葉から来る」とは、この意味であります。

わたしたちが、聖書を読むとは、以上の意味の通りに「聞く」ことにほかなりません。そして、この「聞く」ことに自分を傾ける時を「静聞の時」と申します。わたしたちは、自分を素直にして静聞の時をもち、自分の魂を養いたいと思えます。

「彼女は母にそそのかされて、『ヨハネの首を盆にのせて、ここに持ってきていただきとうございます』と言った。王は困ったが、いったん誓ったのと、また列座の人たちの手前、それを与えるように命じ、人をつかわせて、獄中でヨハネの首を切らせた。」

(マタイ福音書 14章8・9)

信仰に立つ正義の人ヨハネは、私利私慾に生きるヘロデやヘロデヤたちによって、ついに首切られ殺されてしまいました。

しかし、ヘロデがヨハネを殺害するに至るまでには、ヘロデの心中で、いろいろな葛藤(かっとう)がありました。例えば、「ヘロデはヨハネが正しくて聖なる人であることを知って、彼を恐れ、彼に保護を加え、またその教えを聞いて非常に悩みながらも、なお喜んで聞いていた」(マルコ6・20)とあります。たしかに、ヨハネはヘロデにとって政治的にも社会的にも、また個人的にも余計なことをする邪魔者でありましたが、ヨハネの言うことは、そのどれをとっても当り前のこととしてヘロデの心の奥につき刺さりヘロデを悩ましたのです。

しかし、結果に於てヘロデは、当然の言葉としての神の声に耳をふさぎ、神に対して己が目を閉じてしまいました。これは一見、ヘロデが自分の慾に敗けたというふうに見えます。だが、問題は、勝った敗けたということではありません。と申しますのは、わたしたちもヘロデと同じく弱い人間であり、すぐに敗けてしまう者です。決して勝つことは出来ない者です。なぜなら、わたしたちは罪深い者だからです。それ故にこそ、わたしたちに出来る唯一つのことは、一切をゆだねまかすこと。神の慈愛を信じて、それにゆだねること以外にありません。イエスさまは、ゲッセマネの園の祈りに於て「みこころのままになさって下さい」という祈りが、いろいろ祈った末の最後の祈りでした。(マタイ26・39)ヘロデはこの祈りが出来なかったのです。

しかし、これは決して他人ごとではありません。

「イエスは言われた、それをここに持ってきなさい。」

(マタイ福音書 14章18節)

人が自分の力で何とかしようとしているあいだは、宗教も信仰も生れては来ません。それは、自分自身が自分にとって頼るべき神さまになっているからです。

自分自身に頼ると言えば、聖書を読んで、そこに語られし言葉を自分の有限なる人智でもって理解し、自分のものにしよという態度も、自分の力に頼ることであると申せます。この態度は宗教でも信仰でもありません。しかし、いつまでたっても、この態度で聖書の語るところを自分のものにしよと努めている人が多くいますが、これではついに何も得ることができずに終わってしまいます。

人はすべからず皆、聖書の語る言葉を通して、その言葉を語りし者の真心に至らねばなりません。そのためには、その言葉のよって出で来た真心の感化を受けねばならぬのであります。語られし者の人格を超えて、その人格を人格たらしめている永遠真実なるそのものを直接感化される、身に浸ませることが大切というものです。そのような感化を受けた者にとっては、聖書がどこで生れ、どこで語られたのかなどということは問題でなくなるのです。仏教であれ、

キリスト教であれ、そのことがあまり問題ではなくなり、本当の問題は、そのものに永遠の眞実が光りかがやいているか否かということのみであります。

人は、真心の感化を受け、自分の身に浸ませるとき、聞くに従い、いよいよ聞かんことを願ひ、得るにしたがつて、いよいよ未だ得ざる自分を知って求め受けんとするに至るのであります。

自分の力や理解や立場や思いに止まって、そこからイエスさまの言葉を、あれこれいう者にイエスさまは「それをここにもつて来なさい」と申されたのです。聞く耳ある者は聞くべし。

39

「彼らは、波に悩まされていた。イエスは
夜明の四時ごろ、海の上を歩いて彼らの

方へ行かれた」

(マタイ福音書 14章24・25節)

イエスさまが海の上を歩かれたという聖書の言葉を讀んで、ひとは「そんな馬鹿なことがあるか」と言う。それに対して「いや、イエスさまは本当に歩かれたのだ」と言う人がいる。

しかし、右の論議は信仰的に全く無意味の一言につきまします。「歩くはずがない」という方も、「いや、歩いた」と言う方も共に信仰的には無意味な主張をしているのです。なぜでしょうか。

それは、イエス様が海の上を歩いて、波風に悩む弟子たちのもとへ行かれた、という聖書の言葉を「知識」で理解し、「知識」で信じようとするからです。

信仰は「知識」ではない、とよく申されます。「知識」とは、ことがらのからくりを理くつで理解しようという態度のことです。それ故に理くつでは、海の上は歩けないことになります。また、歩いたという自分の知識に固執するのも、やはり一種の知識なのです。

聖書は「知識」ではなく「知恵」で領解されるべきであります。

知恵でもって領解するとは、弟子たちが海の中で波風に悩まされているさまを見られたイエスさまが、わたしたちにとって歩けるはずがない海を歩いて悩める弟子のもとに来て下さったという、その愛を領解することです。（領解とは、心にうくるの意）

知恵とは、恵みを深く知ることではありますが、語られし言葉、おこりしことがらを、知識ではなく、そのころ、それらがよって生じて来た真心の根本の根本に心をそそぎ、それを受ける態度こそ知恵であります。

「わたしの隠れた心に知恵を教えてください」「知恵の心を得させて下さい」（詩51・6。90・12）と祈らざるを得ません。

「心の中から出てくるものがある、これらのものが人を汚すのである。」

(マタイ福音書 15章1節〜20節)

「業」という言葉があります。本来仏教の言葉ですが、わたしたちはこれを日常語として使っています。

業とは、「わざ」とも読みます。「わざ」ならば「行動」とか「行為」とかと同じことなのかというと、少しちがうようです。行為とか行動とかは、人の目によく見えるものですが、業は他人から見ても見えない、人間の心のうちの「わざ」なのです。例えば、わたしたちの心のうちの「うそ」「いつわり」は、他人には見えません。しかし、たとえ他人には見えなくても、当人はそれをよく知っているのです。つまり、他人には外見的に見えない心の業でも、当人にとってはよく見えわかつている業のことを「業」というのです。しかも、他人も自分もどうすることもできない、というところに「業」の深さがあるのです。パウロは自分の業を見て、そのありのままを正直に告白しています。(ロマ・7・15・24)

業は外からでなく、自分の心の中から自分の願いに反して生れ出て来るものです。聖書はこの業にあたるものを「罪」又は「罰の結果」と言っています。パウロは

「自分の内に宿っている罪」、つまり「宿罪」―宿業でもある―をハッキリと見ます。なぜ宿罪したのでしょうか。その宿罪の状態から私たちが逃れるにはどのようにしたらよいのでしょうか。どのようにすれば、わたしたちは自分の宿罪を断つことができるのでしょうか。その道はただ一つ、神の慈愛に、断つに断つことが出来ない宿罪のままをそっくり、お渡しすること、おまかせすること、おゆだねすることです。

このお渡しする祈りこそ「天にまします われらの父よ。御名をあがめさせ給え」という祈りにほかならず、故に、これを念禱することです。

41

「イエスに、天からのしるしを見せて

もらいたいと言った」

(マタイ福音書 16章1節)

わたしたちはすぐにしるしを求めます。しるしとは、わたしたちの目や耳や鼻などで感じる事ができることがらであります。またしるしとは自分の利害得失で計れることがらのことでもあります。

わたしたちは、自分の目や耳や鼻などで感じたことが快なれば、それを良いと言います。ま

た自分の利害得失で計り、その結果自分にとって得ならば、それは良いと思います。つまり、わたしたちは、自分の目や耳や鼻や、または利害得失の世界に生きており、そこで感じることを基準にして良い悪い、正しい正しくないと言ったことを決定しているのです。

人々はイエスさまに言うのです「わたしたちが良いと感じ、納得のゆくしを見させてくれれば、あなたを信じ受け入れてやる」と。

しかし、イエスさまが語られ、行われ、感じ生きていらっしゃる世界は、先述の如きわたしたちの世界ではありません。ですから、しるしを求めるわたしたちの世界からイエスさまの語られ行われる世界を見ると、それは理解できない、つまり思議できない不思議なる世界なのです。

では、イエスさまの世界に目覚めるためにはどうすればよいのでしょうか。一つには、自分の世界とはちがう、もう一つのイエスさまの世界があるということに気づくことであります。そして二つには、イエスさまの言葉や行いのうちに、まことと愛を感じることであります。それに気付く、それを感じるとき、人はそれに生れ、生きるのです。それはちょうど、自分が人間であると気づくとき、その人は人間に生れたのと同じであります。イエスによって神のまこと、神の愛を感じ、気付いたときに、その人は、神のまこと、神の愛の世界に生れたのであります。

「パリサイ人とサドカイ人とのパン種を、

よくよく警戒せよ」

(マタイ福音書 16章6節)

パン種とは、ご存知の通り、パンを大きくふくらませるために用いるものです。イエスさまがここでパン種と申される時、悪い影響を及ぼすものという比喩として語られています。

では、パリサイ人のパン種とは何を意味しているのでしょうか。

世間では、宗教をいろいろな戒律を守り、儀式を守り、それによって清く正しく生活することであると考えている人がいますが、パリサイ人たちも宗教や信仰を、そのように考えることにより、自分もそのように生活すると同時に、他人もそのようにすべきだと考えて、それを強く求めたのです。そして、それが出来なければ、その人は神さまに救われないとパリサイ人は信じたのです。それに対してイエスさまは、戒律主義・形式主義のもつ外見的正しさ重視の考え方に、大切なことは外見でなく内面であり、自分の力によりたので救われることでなく、神の愛が第一であり人の努力は第二であることをお示しになりました。そして、外見主義のもつ偽り、うそを警戒しなさいと申されたのです。

次に、サドカイ人のパン種とは何なのでしょうか。

サドカイ人は神の国は人間的な政治力によって産み出されるものであって、そうすることが神のころにかなっているのだ、と考えていた人たちです。しかし、イエスさまは、政治力によって生活は改善されても、人間は改造されない、神の愛こそ人間を造り変え、世界に平和をもたらすものであることを説き示されました。ですから政治力に全く人間の幸福をたくすことに警戒しなさいと申されたのであります。いずれにしても、今日の世界には、パリサイ人やサドカイ人のパン種が多くあり、わたしたちは、よく警戒しつつ、それらを見すえて生活をしなければなりません。

43

「あなたは わたしをだれと言うか」

(マタイ福音書 16章15節)

イエスさまは、わたしたちがそれぞれ、自分自身の口で自分自身のイエスさまに対する信頼の言葉を、ハッキリと語ることを求められます。なぜイエス様はそれを求められるのでしょうか。それは、心に思っていることを、自分の言葉でハッキリと語るとき、先に自分が心で思っていたとき以上に、その思いは自分にとって明確なものとなり、ハッキリした形となり、いよいよゆるがざるものとなるからです。つまり、心の内で思っているあいだは未だ自分のものでは

なく、それを口でハッキリと言いあらわしたとき、それが本当に自分の身にしみ通り、自分のものとなるのです。

わたしたちが、心に迷うて決しかねていることがあるとき、掛け声と共に、決断し決定するということがあります。また、ときとして、心の内の怒りが、怒り声を口にすると同時に、それまでの心の内のもやもやが一気に爆発して行為にまでおよぶということは、わたしたちがしばしば体験するところです。

自分の口で自分の信仰を言いあらわすことは、信仰を自分のものにするためにとても大切なことなのです。

ですから、「自分の口で、イエスは救い主であると告白するものは救われる」(ロマ10・9と10)とパウロは申しましたが、それは本当にその通りだとおもいます。

世の中には、「あの人がこう言っている。この人がこう言っている」と言うだけで、その意見に左右されて、いつも、くどくどと理屈ばかり言っている人がいますが、そのような人は結局、何一つ自分のものをもつことは出来ないとお申せます。それ故に、イエスさまは「あなたは、わたしをだれと言うか」と申されるのです。

わたしたちが、それに幾度も幾度も答えつづけるとき、その答える言葉が自分の中にしみ込んで行くだけでなく、他の人にも及び広がって行くのです。そしてその言葉通りに自分が形成

されて行くのです。

44

「サタンよ、引きさがれ」

(マタイ福音書 16章23節)

サタンとは、敵対者ということですが、つまり、神に対する敵対者であるところから、サタンを悪魔（あくま）と言うようになりました。

「引きさがれ」とは、正しくは「私の後にひきさがれ」という意味です。

ここでは、ペテロに向けてイエスさまが語っていられますが、ペテロが即サタンなのではありません。ペテロはペテロです。しかし、ペテロがイエスさまの思いを無視して、ペテロ自身の私の思いでもって、イエスさまの思いを支配しようとするとき、そのペテロの私の思いが、イエスさまの思いに敵対する思いと行いであるので、そのことに、サタンよ、わたしの思いに従え!! と申されたのです。

我が支配する世界は我が世界以外の何ものでもありません。つまり我が世界は我以上の世界を決して出ることはありません。自分の我をおしだして自分以外のものを見るものは、自分以外の世界のところがわかりません。自分勝手人間、ひとりよがり人間です。自分の我をすて

れば、自分が素直になり、自分以外の世界のところが見えて来ます。もし世間の人々がみんなこの素直なところにたちかえることができれば、世間は必ず今よりずーと幸いになるにちがひありません。

イエスさまの思い、それは眞実なる者の思い即ち、神さまの思いです。神さまの思いとは慈愛であり恵みそのものです。従って、「サタンよ、わたしの思いの後に従え」とは、神さまの慈愛の中にあなた自身をおけ。ということですよ。

神さまの慈愛が先ずあるのです。いつも、私たちの先に、前にあるのです。その慈愛の後に自分の我を従わせることに気づくこと、これが神の愛に見ざめることであり、信仰に生きることであります。私たちの我は神の思いの先にあるのでしょうか、後にあるのでしょうか。とくとこの点を見つめたいものです。

45

「彼らの目の前でイエスの姿が変り、
その顔は日のように輝き、その衣は
光りのように白くなった」

(マタイ福音書 17章2節)

わたしたちの思議を超えた出来ごとが、イエスさまの身におこったのは、多分ヘルモン山の上に於てでありました。その顔は日のように輝き、その衣は光りのように白くなったというのです。

一体イエスさまに何がおこったのでしょうか。本当に不思議なる出来ごとです。

しかし、信仰的・霊的な目でこれを見ると、決して不思議なる出来ごとではありません。

それは、イエスさまが本・当・の・イエスさまの姿になられたということです。このように申しましても、すぐに理解出来ないかもしれませんが、例えば、イエスさまが語られた言葉に「わたしはよみがえりであり、命である」というのがあります。これは、「わたしは、いつかよみがえるのである」という意味ではありません。また「わたしは永遠に生きる命をもつであろう」という意味ではありません。この言葉は、そのまま、「わたしはよみがえりである。わたしは命そのものである」という意味です。大切な点はどこにあるかと申しますと、イエスさまが申される「わたし」とは、日常生活の中で人々が出会ったところのイエスさまの「わたし」ではなく、つまり肉のイエスさまでなく、霊のイエスさまそのものの「わたし」なのです。私たちがイエスさまの言葉をときとして、仲々理解できないその理由は、肉のイエスさまを基準にして、その言葉を聞くからです。「わたし」の奥にあり「わたし」を「わたし」たらしめている霊的な、永遠なる「わたし」が、実は山上で姿をあらわされたのです。

このことは少しむつかしく説明不十分であり、ご理解願えなかったかと思いますが、大切なことですので、以後この紙面で少しずつ申しあげてみたいとおもっています。

46

「からし種一粒ほどの信仰があるなら、

この山に向って、ここからあすこに

移れ」と言えば、移るであろう」。

(マタイ福音書 17章20節)

本当に信仰があれば山を動かすことができるなどと刀^{きり}んではなりません。山を移す」ということは、ユダヤ人がイエスさまの当時によく用いた言葉でした。難問題を解決するすぐれた人のことを「山を移す人」「山を砕く人」と呼んだといわれています。

つまり、イエスさまが言いたかったことは「信仰は、どのような困難だと思われることでも解決へと人を導いてゆくことを、神にあって信じることだ」ということでもあります。

信仰とは神さまを見つめることではありません。また、自分自身を見つめることでもありません。そうでなくて、神に見つめられている自分を見ることでもあります。

神さまが慈愛をもって、このわたしをいつでも、どこでも見つけつけていて下さる、とい

うことを見ることです。慈とは、他を自分のうちに見る心です。つまり、親が子どもを自分のように見るように見る心です。また、愛とは、自分を他に於て見ることです。つまり、親が子の身になって見る心のことです。

このような慈愛なる神さまにいつも、どこでも見つめられているのが、このわたしなのだということを見て、自分自身の歩みをする。また、他事にかかわり、他人にかかわる、つまり、慈愛なる神に見られているものとして、自分の人生のすべての出来ごとを見るのが信仰なのであります。

自分が神を礼拝する以前に、先ず神が自分を礼し、拝して下さる、だから礼拝をするのです。この神の慈愛を見る者の心は平安に満ちるのです。強く生きる勇氣と希望とが与えられます。その時、自分もいろいろな困難の山は、本当に移り出すのです。

宮の納入金を集める人が ペテロのところに来て言った、「あなたの先生は宮の納入金を納めないのか」。ペテロは「納めておられます」と言った。

(マタイ福音書 17章24・25節)

イエスさまが十字架刑に処せられるに至った罪の一つは神殿冒瀆ということでした。

人々にとって神殿とは正に文字通り、神が住み給う殿ごてんであったのです。故に、そこは神聖な場であり、恵みをいただける場であり、祈りがきかれる場でありました。人々は神殿そのものを神として崇めていたのです。ところが、このような神殿に対して、イエスさまが「宮より大おおいなるものがここにいます」(マタイ12・6)とご自分のことを申されたり、さらに、四十六年の月日をついやして造りあげられた神殿を指して、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちにて建てる」(ヨハネ2・19)などと申されたのですから神殿冒瀆もはなはだしいと申せま

す。しかし、パウロがアテネ伝道で叫んだように「天地万物を造った神は天地の主なのだから、手で造った宮などには住み給わない」(行法17・24)。神はわたしたち一人一人の内に霊として住み給うのだとイエスさまは達見していらっしゃいました。

ですから、イエスさまにとって神殿など、どうでもよかったです。大切なことは、神そのものの愛、神の愛の中に生きる自分を自覚することなのです。

ところが、イエスさまは、だからと言って神殿に納めるお金をこばまれません。なぜなのでしょう。それは、神殿は神ではなく、ただの石や木の建物で、それ自体全く空しいものです。しかし、わたしたち凡人にとっては、その建物を通して、礼拝する心をおぼえ、感謝する心を身につけ、祈ることの尊さを知ることができるのです。それ故に、空しいけれども、一つの役わりをはたし、凡人を神の愛に目ざめしむる役わりをはたしていることに気づくなら、空しいと言って捨てるのでなく、空しさを知りつつ、それは大切にしなければならぬのであります。ここにイエスさまの思いやりの心があります。

48

「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のように
ならなければ、天国にはいることはできない。」

(マタイ福音書 18章3節)

「バラノ木ニ バラノ花サク ナニゴトノ 不思議ナケレド」 (北原白秋)

バラの木にバラの花が咲くことは当り前のことだと思ふのが大方の大人の思いです。

しかし、幼な子は大人に問いかけます。「なぜバラの木にバラの花が咲くの？」と。これが大人と幼な子とのちがいです。

大人は、時として自分の生活に於て接するいろいろなことがらについて、何の不思議も覚ゆることなく、すべて当り前のこととして、すませてしまっています。

しかし、もし賢明なる大人であるならば、この幼な子の問いに對して、「何を馬鹿なことを言っているの？バラの木にバラの花が咲くのは当り前のことでしょう？つまらぬことを言っていないで、しっかりと前を向いて歩かないと、ころぶわよ！」などと決して言わないでしょう。この幼な子の問いに觸発されて、「本当だ、バラの木に、バラの花が咲くことは当り前だと思っていたが、よく思い返してみると、不思議はないが、その実、不思議なことだ、この当り前は何とありがたいことだ。何ぜ、この当り前のことのありがたさに今まで気づかなかったのだろう」と、当り前の世界のありがたさに目を開かされるにちがひありません。この時、人間は本当に謙虚にされ、己れの考え、わたしの思い、という「我」が消えて、目前にある多くの神さまのおめぐみが見えてくるのです。当り前のこととして見たり、感じたりしていたことが尊く、ありがたく覚えられるようになって来るのです。

「罪の誘惑は必ず来る。しかし、それきたらせる人は、わざわいである。」

(マタイ福音書 18章7節)

人はまず誘われて罪を犯す。罪への誘い手は、多くの場合同じ人間である。人が罪を犯すときには、最初に必ず誘惑を受ける。また、悪いことをするために最初の励ましが必要である。また、禁じられていることをするために、最初は誰かによって悪の道に押し出されなければならぬ。とある人が申していますが、本当にその通りだと思います。

聖書の中に出て来るサタンとは、ほかでもなく「罪への誘惑者」なのであります。

「罪への誘惑者」とは、愛を破る者であり、平和を破り混乱と争いを生む者であります。

旧約聖書創世記にあるアダムとエバを罪の誘惑へと働きかけたのはサタンでありました。神とアダム、神とエバとの愛と信頼、その間の和をつぶしたのは誘惑の罪であります。

罪への誘惑とは和らぎを混乱へといざなうことであります。和らぎとは温かさであり、美しさであり、なごやかさであります。さらに優(やさし)さでもあります。さらに加えて「柔軟心(じゅうなんしん)でもあります。我がない心です。

右のような、和らぎと温かさ、美しさとなごやかさ、優さと柔軟心、我のなき心を感わし、

混乱させるものこそ、罪への誘惑者であります。

イエスさまがそのはじめ、神の業に己れをささげ出発しようとした時、山上に於て誘惑者があらわれたのもうなずけます。

今日も尚、「ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩きまわっている」サタンのあることを（ペテロ第一 5・8—9）人々は、しっかりとわきまえていなければなりません。

50

「これらの小さい者のひとりが減びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない。」

（マタイ福音書 18章14節）

わたしはどのような者でありましょうか。それは、わたしとは神に願いをかけられた者である、と申せます。それは、子どもとはどのような者であるかと言えば、親に願いをかけられた者である、というのと同じであります。

子どもが親の慈愛の中にあるように、わたしという者も神の大慈愛の中にある者なのです。

神は愛である、と聖書は語ります。わたしが愛の心をもっているか否かは、一切問いません。

わたしの愛とは全く関係なく、わたしの愛など問題にすることなく、わたしのおもい、行いに一切先立って愛し、めぐんで下さるのが神は愛である、ということなのであります。神さまが「めぐむ」とは、いかなれば芽をはぐむ、つまり、芽をくむということです。大地につつまれた固い種が大地の暖かさ、しめりけ、養分により芽が出て来る、と同じように神の暖かき慈愛によりつつまれ生かされる。これが、神のめぐみであります。この神のめぐみを己が心の深みに於て感じさせていただくことが、これ即ち信ずることなのであります。ある外国の神学者は、これを「応答」即ち神のめぐみを感じ、応じお答えすることが信仰・信ずるといふことであると申しました。故に、信ずるとは、何も見えない、感じないのに信ずるといふではありません。それは盲信であります。また、何も無いのにあるように思い込んで信ずるとは狂信であります。信ずるとは、神の慈愛を感応することでありす。すべてが当り前のことでなく、ありがたいことだなあ！と深く深く感応するとき、明るさが生じ、安らぎが生れ、和らぎのところが身体一ぱいにみなぎるのです。その昔、イエスさまの弟子たちは、その神の大慈愛を、イエスさまの十字架に於て見たのであります。

「もし、あなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたは兄弟を得たことになる。もし聞いてくれないなら、ほかに、ひとりふたりを一緒に連れて行きなさい」

(マタイ福音書 18章16節)

古いユダヤ教の教師ツビの言葉に、「一人で人を裁いてはならない。一人で裁けるのは神だけである」というのがあるそうです。

たしかに、わたしたちがものを言うとき、決して客観的に、つまり第三者の立場で自分は語っているつもりでも、その実、はたから見たり聞いたりしていると、その人の主観、つまり、その人の私の考え、思いで語っているということがわかります。ところが、世の中には、そのことに向いて気づくことなく、わたしは中立の立場で見たり、聞いたり、語ったり、判断したりしているのだ、と信じてうたがわれない人がいます。さらに、他人の心の中の想いまで勝手に自分で読みとって、自分がよみとった他人の想いを正しくよみとったと確信し、とやかく批判し、さもかしこそうに語る人がいます。世の中に困った人というのがありますが、これほど困った人はほかにいないと申せます。そんな人は、結局自分ひとりで思い込み、確信して喜こんだ

り、悲しんだり、怒ったりしている人だと申せます。

わたしたちは、人間の想い、思ひは、はたからは仲々わからないものである、深い深い淵ふちの底のようなものが、人の心であり思ひなのだということを、しっかとわきまえておくべきだと思ひます。

それ故に、わたしたちは人を見るに、つねに我を出さず謙虚でありたいとおもいますし、愛をもってゆかねばならぬとおもいます。

かるがるしく裁いたり、同調したり、行動をしてはなりません。

とくに、年がすすんでくるとき尚のこと、このことをわきまえたいとおもいます。

52

「わたしがあわれんでやったように、あの仲間を

あわれんでやるべきではなかったか。」

(マタイ福音書 18章33節)

わづかなる 庭の小草の白露を もとめて宿る秋の夜の月 これは西行の歌です。正に、神のご愛は月の光りが庭のかたすみにある、あるかなきかにひとしい小さな草にも、光々と照るごとくに、善人にも、悪人にも、小人にも大人にもあまねくその及ばざるはないのでありま

す。神は愛なり。とはこのことでもあります。イエスキリストの十字架のご愛とは、すべて至らぬところなしという神のご愛を示しています。

この神のご愛を感じ、そのご愛に応じることが信仰なのであります。

先ず神の愛があり、その愛のうちにわたしが在る。この順序は絶対にかわることはないのであります。

神の愛を感じる。そしてその愛に応じる。ここに信仰者のよろこびの生活があります。いま一つの話を思い出します。

「森が焼けた。すると、鳩がどこかの池で羽を水びたしにしてきて、その森の火を消そうとする。そんな羽ばたきの水くらいで森の火が消えるはずがないけれど、鳩は一心に消そうとしている。そのころは、この森に恩がある。この森が自分を一羽の鳩に育ててくれた。その恩を思えば、森が焼けるというのにじつとしておれない。」

水をしたした羽のはばたきなどで森の火は、とうてい消えないでしょう。そうです。消えるか、消えないかはどうでもよいのです。自分に多くの恵みを与え、育ててくれた森を想うおもいが、鳩をその行為へとかりたせたのです。

「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである。」(ヨハネ第一・4・19)

さて、鳩の行いを見た天使は鳩を助けて、森の火は消えたと物語りはむすんでいます。信仰はついに神によりて完成するのです。

53

「永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」

(マタイ福音書 19章16節)

永遠の生命ということは、ただ、いつまでも死なない生命ということではありません。ただ、いつまでも死なずに生きていることは、かならずしも幸福とは申せません。相互に、にくしみ合い、争い合って苦しみつつ生きながらえたとて、それがどうして幸いだと言えるでしょうか。永遠とはアイオーニオスという言葉の訳ですが「それはただ、永遠につづくという意味ではなく、神にふさわしいもの、神に属するもの、神の特質という意味」があるとされています。では、神の特質とはなんでしょうか。ほかでもなく、それは、神が愛、即ち大慈愛そのものであるということです。とすると、永遠の生命とは、神さまの大慈愛の中に生きる命ということになります。

どうすれば、わたしたちは、神さまの大きな慈愛の中に生きる命をもつことができるので

しょうか。そのこたえは、ただ一つ、神のご慈愛の中にいる只今の自分に気づくことです。

わたしたちは、何かをしなければならないと思っています。たしかに、この世の中では、何かを得ようとすれば、必ず、それにふさわしい何かをしてこそ、そのお返しとして、はじめて与えられるのです。これが現実の法則です。

しかし、神のご慈愛は、いかなる条件も求められないのです。親が子を想い愛し与えるように、与えるばかりでいて下さるのです。現に、只今、わたしたちはすべてを与えられているのです。ですから生きていられるのです。

神のご慈愛に今、ここで開眼したいものです。そのとき、死んでも、生きても、すべて神のご慈愛の生命の中という平安と喜びが、自分のうちにわき上って来ます。

54

「あとの者は先になり、先の者は

あとになるであろう。」

(マタイ福音書 20章16節)

このイエスさまの言葉の意味は、つまるところ、「神の前では、あとも先もない」ということです。

人の世では、先だのあとだの、えらいのえらくないの、よいのわるいの……などとすぐ分類し、価値を判断して、それをもって自分を卑下したり、さらに、他人を見下げたりします。

しかし、神の前では、いかなる人間の誇りも、いかなる卑下も全く通用いたしません。

神の前では、人がくだす善悪・優劣など一切問題にはされません。なぜならば、神の前に於ける人間はすべて、罪悪深重なる罪人以外の何者でもあり得ないからです。

罪悪深重なる者が、自分をそれと知らずに、あいつがよい、こいつが悪い。あとだ、先だなどとやっている姿は、身のほど知らずの言動であり、正に「天に座する者笑い給わん」であります。

神の前において大切な一点は何か。それは、己れ自身、人間自身が、その最も深いところで罪悪深重・罪人であり、それゆえにこそ神はこの罪人なる私を深くあわれみ、助け救うて下さるということに本当に気づく、その事実を眼を開かされるということであります。神は愛であるとは、この事実を事実として言いあらわした言葉です。

わたしたちが言う善も悪も優も劣も、先もあと……そのすべてが、この神の愛の中でゆるされてあらしめられているのです。しかるに、この大切な事実を領解することなく聖書を学んだり、祈ったり、愛を語ったり、愛を行ったりしたとて、それは、神の前に見当はずれのことをしていくにしかすぎないのであります。神を習うとは自己を習うことであり、自己を習うと

は神のゆるしの中にある自己に気づくことであります。

55

「そして、三日目によりがえるであろう」

(マタイ福音書 20章16節)

イエスさまは、「おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」。(ピリピ2・8)だれに対して従順であられたのでしょうか。神です、神のご自分に對するみこころに對して従順であられたのです。

従順とは、己れを神にあけわたしことです。神の中に己れを投げ込むことです。力をもいれず、気もいれず、一切の己のはからいをもたずして、神の己れに對するみこころの中に、己れを投げ込むことです。

「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」。(ロマ8・28)神が愛であるとは、現在、只今、この足下に於て、神がこのわたしに愛であることであり、その事実を確認し確信すること、していることの告白であります。

イエスさまを生かした霊は、わたしたちをも生かすのです。イエスを生かした霊が、わたし

たちの中に生かされるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに死ぬべきものをも神にあって生かして下さるのです。(ロマ8・10)

信仰は自分の働きで成るものではありません。信仰の導き手は神ご自身です。さらに、信仰の完成者も神ご自身であります。(ヘブル人への手紙12・2)

56

「わたしが来たのは仕えられるためではなく、仕えるためである」

(マタイ福音書 20章28節)

人に仕えられることは悪であって、人に仕えることは善であるなどと、イエスさまは申しつけていられません。

イエスさまが申されることは、自分のことだけに關心をもち、自分のことだけに配慮をもつ生き方は、本当に自分というものを生かすことにはなりませんよ、と言っていられるのです。

わたしとは、あなたに対するわたしであり、あなたがあってわたしなのであります。

にもかかわらず、あたかもあなたなど全く存在しないかのように、ただわたしのみに目をやり、關心をいだき、配慮をするわたしの生き方は、実は、わたしが本当の意味に於ては不在で

あると申せます。

わたしの喜びも悲しみもそれは、あなたとの関わりの中に於てあるのです。言うなれば喜びも悲しみも、わたしひとり得るのではなく、あなたとの関わりに於て、あなたから得ているものなのであります。

自分だけのことを考え、自分のみをたて、自分が仕えられることのみを考える人間には、この人間の原則が理解されておらず、人間の正しい在り方、当り前の在り方、即ち、神がそのように創造し給うた人間の正しい自然の在り方から、はずれていると申せます。

イエスさまが、仕えられる人にならず、仕える人になれと申される意味は実にここにあるのであって、決して、今人々から仕えられて社会的に仕事をしている人々を悪人よばわりしたり、仕えている人がすぐに善人だと申しこられるものではありません。世の中には、仕えることによって、自己を立てようと考える人々だけなのでありますから。イエスさまの言葉の奥をしっかりと見たいと思います。

「群衆のうちの多くの者は自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの者たちは木の枝を切ってきて道に敷いた。そして群衆は、前に行く者も、あとに従う者も、ホザナ・ホザナと言って叫びつづけた」

(マタイ福音書 21章8・9節)

エルサレムの都に入りたもうたイエスさまを人々は群れをなして、口々にホザナ・ホザナと叫びつつ、感動的に迎えた。ホザナとは「今救いたまえ」と救い主・王に向って訴える言葉であり、叫びであり、祈りである。正にその時のイエスさまは群衆にとっては、かけがえのない救い主であったのです。

ところが、その群衆は、先に語った言葉、叫び、祈りの舌のねの未だわからぬうちに、イエス様を十字架につけて殺害しようとするバリサイ・サドカイの宗教的指導者の、独善的な陰謀のたくみな煽動にあおられて、「イエスを十字架につけよ」と叫んで止まぬ人々と化するのです。(マタイ27・11〜26)

一体全体、この群衆のところがわりはどうしたというのでしょうか。

しかし、決しておどろくことはない。空しいことを語り、好奇心におどらされ、曖昧にこと

がらに接し、深く物事を考え追求することなく、加えて、目前の利害にふりまわされてしまうのが群衆であり、わたしたちなのです。ペテロに代表されるイエスさまの弟子たちがそうであり、パウロがそれで悩み、自ら多くの被害を受け、原始教団がそのうずの中で荒れ、全人類が今に至るまで、すべての処でこれに悩まされ苦しんでいます。

人間のどこに真実があり、人間のどこに愛があるというのか。どこにもない。すべてが幻想なのであります。にもかかわらず、真実がある。愛がある。という声が人間の向う側から聞こえて来る。イエス様は、その声を全身で行^ましたのです。正に、聞く耳ある者は聞くべし。であります。

58

「わたしの家は 祈りの家となえらるべきである」と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巢にしている」。

(マタイ福音書 21章13節)

わたしたちが その人生に於てもつ問題が 大きく分けて二つあります。一つは 人生についてであり、今一つは人生そのものについてであります。

人生についての問題とは、わたしたちが生きて行く日々に出会う、さまざまな問題であります。いろいろな人間関係の悩み、お金の問題、着ること、食うこと、勉強のこと、就職のこと、結婚のこと……これらは数えあげれば全くきりがありません。今これらの悩み、くるしみを「行苦」と申しますならば、次の人生そのものの苦しき、問題を「罪苦」と言えます。罪苦とは、人間そのものが好むと好まざるとにかかわらず、人間性そのものにもつ問題です。「善をしようとしても出来ない自分の姿」そのものの問題です。また「あしたも、ゆうべも、いとむことは名聞。昨日の今日も、おもうことは利養」(法念)という己れのすがたの問題、つまり、罪悪深重、煩惱熾盛、地獄一定という、自分のありさまそのものの問題であります。

イエスさまが人間の救いというとき、まず「罪苦」からの救いを言うのです。さすれば「行苦」からの救いもおのずと現成すると申されます。

祈りとは「罪苦」から救い給うものへの喜び、感謝の祈りであります。

しかし、神殿で神の名により品物を人々に高く売りつけ、利益を得ることで、己れが行苦からの救いの手段とした商人に、又その商人と手を裏で結んでいた祭司と神殿宗教にイエスさまはいきどおりと悲しさを覚えられたのです。今日、私たちの周囲にある宗教を見ると、罪苦を全く問うことなく、ひたすら行苦からの救いを説きたただご利益宗教の何と多きことか思うとき、宗教亡国のついに来るを、まこと憂えるものであります。

「祈るとき、信じて求めるものは、
みな与えられるであろう」

(マタイ福音書 21章22節)

信じて祈れば何んでも与えられ、望みはかなえられる。と大言しているではありません。右のイエスキリストの言葉は「深信」を語っていられるのであります。

ところで「信」という字のその下に信のはたらきをあらわす字をつけた語があります。信念・信仰・信用・信頼……。それに対して「信」の上に形容詞をつけて、信のころをあきらかにしようとする言葉もあります。純信とか篤信とか……。そして深信もその一つです。即ち深信とは「深い信」又は「深く信ずる」ということです。ここでは、信のころが言いあらわされているのですが、正に先のイエスキリストの言葉は、信の深さの必要性、大切さを語っていられるのであります。

では、信の深さとは具体的にどういふことなのでしょう。これは二つに分けることができます。一つには、己れの罪深さについての「深信」であり、二つには、神さまの絶対的な慈愛についての「深信」であります。正しい信仰とは、この二つの「深信」が一つであるところに生れて来るのであります。

神は愛であるから何でも下さる。どのようなことでもゆるして下さる、だから祈り求めよ！
では正しい信仰ではなく我欲の深信であります。他方、わたしは罪人です。悪人です。だめな人間です。というばかりの深信では、人間を立ち上げるところか、だめ人間にしてしまします。

正しい信仰は、自分の罪人なることを自覚して、それをゆるして下さる神の愛にめざめさせられ、さらに、神の愛を自覚して自分の罪人なることにめざめさせられるという二つの深信に於て得るのであります。そのことをパウロは「罪のまし加わったところには、恵みもますます満ちあふれた」（ロマ5・20）と申しました。（コリント第二・12・9・10参照）

60

「何の権威によって、これらの事をするのですか。
だれが、そうする権威を授けたのですか」。

（マタイ福音書 21章23節）

イエスさまが語ったり行ったりするそれらは、一体如何なる理由によって正しく尊いのでしょうか。「それは神の言葉だからです」と答える人は、「なぜ神の言葉は正しく尊いのだろうか」と自分自身に深く問うてみる必要があります。また「なぜイエスさまの語られる言葉が神の言

葉なのだろうか」と深く問うてみることも必要であります。

もし、その正しさ、尊さの理由を、つまるところ、何かの権威者に帰してしまおうとするならば、それは「何の権威によって、これらのことをするのか」とイエスさまに迫った愚かな宗教家たちと同じになってしまいます。この愚かな宗教家たちの心の内にあった権威者とは、自分が絶対者だと信ずる「神」であつたのです。

イエスさまが語られる「権威」とは一体何なのでしょうか。

権威とは、ものごとの道理なのです。例えば、互に人と人とが愛し合うとは、道理であつてそれ自体正しく、尊い事実なのです。それ自体正しく、尊い事実が権威なのであります。ですから、それ自体を語り、それ自体を行ずるイエスさまは、権威であり、それ自体を示す聖書（律法）は正しく、尊いのであります。また、それ自体はどのような人の説明も解釈も必要としません。どのような知恵も知識も超えて、又かかわりなく、それ自体正しく、尊い事実であり、真実なのです。ですから権威は「自由」とも聖書では訳されているのです。（行伝5・4。コリント第一8・9。7・4）

尚、権威が物事の道理であるとは、道理（言）（ヨハネ1・1と5）にはかなりません。人がこの「権威」のうえに立つ時、真人となるのであります。

「あなたがたはそれを見たのに、あとになっても、心をいれ変えて彼を信じようとしなかった」

(マタイ福音書 21章32節)

同じものを多くの人々が見ても、その感じ方はその人その人によってちがいます。なぜでしょうか。それは、普通一般に、わたしたちがものを見るといふとき、眞実そのものを見ているように思い込んでいますが、その実わたしたちは、直接そのものを見ているのでなく、自分の心にうつしだされたものを見ているのです。ですから、そのときわたしの心が怒っていたり、喜んでいたり、悲しんでいたりと、そのうつり方、つまり感じ方はいろいろと変わってしまうのです。わたしという一人の場合に於てもそのとき、そのときの状態でいろいろそのうつり方、つまり感じ方がちがうのですから、ましてや人それぞれに於いてはちがうのは当たり前と申せます。

では誰れが、本当のものを見ているのでしょうか。ひょっとすると、すべての人々が自分の心にうつし出されたものを見ているだけで、誰れも本当のものを見ていないのではないかと申せます。

本当のそのものを本当に見るためにはどうすればよいのでしょうか。それは、自分の心で見ること・を止めること・です。つまり「我が心」で見ないということ・です。心を貧しくする」

(マタイ5・3) ことです。すると、そのものがそのものままに見えて来るのです。そのように見るためにはどうすればよいのでしょうか。自分の立場から見ないで、そのものの心でみる。つまり相手の立場で相手を見ると、相手ははっきりと見えて来るのです。これが愛であり、本当の謙虚というものです。だのに、いつまでたっても自分の心で信じたり理解しようとしたり、祈ったり、つまり見ているには結局何も見えては来ないと申せます。

62

「家造りらの捨てた石が、隅のかしら石と
なった。これは神がなされたことでわた
したちの目には不思議に見える。」

(マタイ福音書 21章42節)

誤りの熱心というものがあります。的(まと)をえていない熱心とでも言いましょうか、このような熱心は、当の本人はいうにおよばず、周囲の人々にまで大いなる迷惑をかけてしまいます。

人間にとって、最も恐ろしくて困ったことの一つは、誤りの熱心に陥ることであり、その誤りの熱心さがもたらすことからあります。誤った政治的熱心、宗教的熱心、学問的熱心……。その誤りの熱心故に、家庭を破壊し、社会を混乱させ、国家を危機にみちびき、はてには世界を滅亡させかねませんし、事実それをおもわしめるような出来ごとが現在わたしたちの身のまわりにおこりつつあります。

では、正しい熱心と誤りの熱心とはどこがちがうのでしょうか。それについてパウロははっきりと語ります。

「彼らが、神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである」(ロマ10・3)

誤った熱心とは「我」の熱心、つまり、己れの我を立てようとする熱心のことです。「わたしは○○、××という信念に生きている……」などと胸をはって叫ぶ人がいますが、そういう人は己れの信ずる念おもいに生きる人で、恐ろしいのは他が見えなくなるといことです。

信仰は信念ではありません。いかなる人の主義・主張・意見・解釈をも超えたところの、いかなる人にも当てはまる真実に生かされることが正しい熱心の根きよであり、それに生きることが信仰生活なのであります。

「王は、その僕たちをつかわして、この婚宴に招かれた人たちを呼ばせたが、その人たちは
こようとしなかった」

(マタイ福音書 22章3節)

世の中には「宗教」に全く無関心な人がいます。そのような人は、そのまましておくほかしかたがないと思います。まさに、ぶたに真珠。馬の耳に念仏だからです。

しかし、関心はあるが自分の生活の身のまわりのことに心も身体も用いて宗教については二の次、三の次ついには忘れてしまおうという人もいます。

「宗」とはこころ根ということであります。つまり人間が人間として生きて行くために、人間の心の最も深いところに根として心得ておかねばならぬもの、それが宗教であります。

ところが、人は目に見えることに関心を向け、心を奪われて、自分の最も大切なこころ根について省みることを二の次、三の次にして、ついに忘れてしまおう、つまり根なし草のように、切り花のように生きてしまおうのです。そのような人生は根がない、足が地についていないので何か空しく感じられ、本当の落ちつきがなく、ついに枯れてしまおうのです。

イエスさまは、わたしにつながっていないさい。神につながっていないさい。(ヨハネ15・1)

と申されます。つまり、神の愛をあなたのこころ根としなさいと申されるのです。それは「流れのほとりに植えられし木がゆたかに成長する」ようなものとなるのです。(詩1・3)

美しい花を咲かせ、果を得るためには、その木の根がどこに立っているか、在るかということが最も大切なことであることは、少し賢明な人ならばすぐ解るはずで

正しい宗教はそれを語り、教え、示し、与えようとしているのです。

64

「友よ、どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいつてきたのですか」。

(マタイ福音書 22章11節)

これは、王の婚宴の席に礼服を着ないで出席した者への王の言葉として、イエスさまが語られたものです。

ここで語られていることは「礼服」のことではありません。「礼服」にとらわれていては、イエスさまの語られる言葉は聞こえてはきません。

「礼服」とは「かたち」であり「すがた」であります。それらは「あらわれたもの」です。「すがた」「かたち」はそれ自身あるのではなく、「あらわれたもの」なのです。「実」とは

あらわれたものである故に「良い木はよい実をむすぶ」とイエスマは申されます。

「すがた」「かたち」は「こころ」のあらわれたものです。ですから、実によって木を知ることができなのです。(マタイ・7・16。12・33)

「こころ」だけがあるのではないし、「かたち」「すがた」だけがあるのでもありません。そのように考えるのは観念的です。ものがあるとは「すがた」と「こころ」とが一体で在るのです。「かたち」と「こころ」とが不離であるのです。それゆえに、わたしたちは、天地のすべてに在るものがおめぐみとして感謝できるのです。

しかし、それを知らない現代人は「もの」をもつと見、「こころ」をこころとして、それぞれ独立して考え見るから「感謝」ということは生れて来ません。そのような態度でいくら学問し研究しても何もうまれてはきません。馬鹿げたことです。

「礼服」を着ないで出席した人とは「こころない」人です。結局そういう人は、何も得ることなくむなしくおわるでしょう。

はたして、礼服をつけて、礼拝に参加しているか、自分のすがたを見ることが大切です。

「求めよ、そうすれば
与えられるであろう」

(マタイ福音書 7章7節)

イエス様は、「求めよ」と叱咤激励しつたげきいをしているのではない。「求めよ」という言葉に執れるとどまとき、ここで語られているイエス様の本当の言葉は聞けない。実は、イエス様は、「求めよ」などとは一言半句も語ってはいられない。

イエス様がここで語っていられることは、神の愛そのものです。

神の愛が一切に先だつてあるということ、この全宇宙が全く無に帰きしても、その神の愛は毛といえどもなくなることはないという、その現実そのもののみが語られ提示されている、これが「与えられる」ということであります。

「与えられる」とは「与えられている」ということであります。「与えられていて」も未だそれに開眼せぬものにとつては「与えられていない」のである。「与えられていない」とする盲目の自己に止まる限り「与えられている」という現実は見えず、従つて自己自身証すること
は出来ません。

人が自分に止まり、自分の力量で考え、信じ、思いをめぐらす限り、いつまでたつても「与

えられた」「与えられない」といった、いわば、どうでもよいことにふりまわされてつきることがない。

大切なことは、自分を神の愛の只中におくことである。つまり、「与えられている」という現実に自分をおくこと、その時、ありがたさが迫り来り、わき上り、うしおのごとく来りて自分をおおいつつみ、合掌の姿がおのずと自分のうえに現れる。これこそ「求めよ」という姿そのものにはかならない。信仰者の姿は、それ以上でもそれ以下でもなく、この姿につきると申せます。

66

「カイザルのものはカイザルに、
神のものは神に返しなさい。」

(マタイ福音書 22章21節)

カイザルとはローマ皇帝のよび名であります。イエス様の当時ユダヤの国の支配者としてローマに君臨していました。

イエス様に悪意をいだいていた当時の宗教家が、イエス様をおとしいれるために、国民がこころよくは思っていない、ローマへ納める税金問題をとり出して、カイザルと神とどちらが尊いかという、いづれか一方の答えを引き出そうとしたのです。もし、カイザルに税金を納めよ

とイエス様が申されれば、カイザルを神より尊いものとするイエスは民衆より尊敬されず、みすてられるでしょうし、また、神を尊びそれに納めよ、と言えばローマの権力に逆うことで、イエス様は反権力として捕えられてしまいます。

しかし、イエス様の答えは表記の通りでした。では、この言葉のころは何でしょうか。これをカイザルは政治、神を宗教と解して政治と宗教の分離を説明する人がいますが、そんなことをイエス様は語ってはいられません。また、カイザル（政治）と神（宗教）を両方とも是認されたのでもありません。

ハッキリ言って、イエス様にとっては、政治（カイザル）や宗教（神）などどちらでもよいのです。政治政治：ということ、また、宗教宗教：ということは、イエス様にとってそれ自体空しいのです。イエス様にとって大切なことは、政治も宗教もその他一切が神そのもののうえに許されて在るのであり、その事実を深く深くわきまえて、それが立っているか否かということです。そのわきまえに立つ時政治は正しく政治としてあり、宗教は正しく宗教としてあることがおのずとできるのです。それはちょうど、神に在る生が感謝であると共に、神に在る死も感謝であるのと同じたぐいであります。

「神は死んだものの神ではなく、
生きてゐるものの神である。」

(マタイ福音書 22章32節)

このイエス様の言葉は、私達の甘い来世に対する信仰を撃破する。

イエス様はキツパリと申されます、「神は生きてゐる者の神である」と。生きてゐる者とは、今ここにゐる者、即ち只今ここにゐる私であり、あなたを指すのであります。

生きてゐる者の神であるとは、端的に言えば、現在只今おまえの足下に神がある、見よ見よ。ということにはほかなりません。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざを示す。この日は言葉をかの日に伝え、この夜は知識をかの夜に告げる。話すことなく、語ることなく、その声も聞こえないのに、そのひびきは全地にあまねく、その言葉は世界の果てにまで及ぶ。」

(詩篇19・1-12)

たしかに神は、現在只今、私の前に後に、頭上に足下に、側面に自分自身に現成しています。しかし、それは話すことなく、語ることなく、その声は聞こえない、にもかかわらず、そのひびきは全地の果てにまで、大音響としてとどろき渡っている。私達はすでにそれを聞いている、

見ている。

しかるに、「目があっても見えず、耳があっても聞えない」

(マルコ 8・18)

私達が眼前の物・人・事にとらわれる時、その物・人・事は見え聞えても、その物、その事、その人自体が語る、「全地にあまねき、響き渡る声」は聞こえず、見えずに終る。

「而今の山水は、古仏の道現成なり」(道元)と見る目を私達は聖靈に於て得なければ、その盲目のうえに、いかなる文明文化を築いてもそれは、しょせん砂上の楼閣にしかすぎないと知るべきであります。

68

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、

主なるあなたの神を愛せよ。また、自分を愛す

るようにあなたの隣り人を愛せよ。」

(マタイ福音書 22章 37〜39節)

心をつくし、精神をつくし、思いをつくすということは、自分自身の全てということであり、さらに、神を愛せよということは、神に帰依せよ、ということでもあります。つまり、あなた自身の全てを神に帰依させなさい、とイエス様は申されるのです。なぜイエス様は、この

ように申されるのか、その理由はいとも簡単です。私達がまず帰るべきところに帰り、依るべきところに依って、しっかりと落ちつき、安心し、自己を正しく整えてこそ、何事もまともに見聞きし、かつ行えるからです。

私達の魂はいつも本当に落ちつける場を求めています。そこに帰り行き、そこに依りたのんでこそ、はじめて安んずるといふそこ。このそこを求めるところが求道心であり、宗教心なのであります。そして、そのことを「神」とイエス様は申されるのです。そして、そこに己れを安んずること、そこに自分自身を依りたのみ帰して置くこと、つまり、神に帰依することが、神を愛するといふのであります。

私達の魂はいつも己れの故郷を求め続けてやみません。つまり、神に出会うまで決して安心しないのであります。

ところで、わたしたちが、そこへ帰るといふことは、ただ安心して落ちつくといふことにとどまらず、また安んじて外へ出て行けるということでもあるのです。つまり、自分を愛するよう隣り人を愛するようになるということの、おのずからなる生き方が生れ出て来るところのそこでもあるのです。ですからイエス様は、先ず「心と精神と思をつくして神を愛せよ」と申されるのです。この第一と第二の順序を混同してはなりません。

「あなた方は先生と呼ばれてはならない。

あなた方の先生は、ただひとりであって、

あなた方はみな兄弟なのだから。」

(マタイ福音書 23章8節)

これは、正真正銘イエス様のお言葉だと思ふ。なぜならこのような言葉は、イエス様だからこそ語り得るのであって、われわれには、とても語り得るような言葉ではありません。

例えば、兄弟が兄弟だけを見て、われわれは兄弟であるというのと、兄弟がその父母を見てわれわれは兄弟だというのは、その兄弟であるという内容は、全く異ってくる。

イエス様が、人や物、つまり、すべての存在を見る時、(そのすべての存在のよって生じた根本の根本に目を注ぎ、それをはっきりと見極め、見とどけ、そこに立って、すべてを見る時)、それらは、個々別々でありつつ、すべては神さまの愛とお恵みのうちに、そう、あらしめられてゐる「一」なる存在にしかすぎなくなるのです。

だからこそ、人々に思ひわすらうな!!と語る時、空の鳥を見よ!! 野の花を見よ!! と語られるのです。(マタイ6・25) イエス様にとっては、そこでは人間、鳥、花などは別々でありつつ、実はみな、それらは兄弟なのです。つまり、それらは個々別々の「多」でありつつ、そ

のままで真実、本当に生かされている「一」なのだ!!ということを徹頭徹尾お恵みとして確見している。これは、私達には出来ないことです。頭(知)で理解できても体(生活)では出来ない。だから、安っぽい兄弟呼ばわりをして、相互に憎み合うという偽善が生れて来るのです。だから、安っぽい兄弟呼ばわりの根本的な誤りをイエス様はすどく指摘される(マタイ5・22)

それにしても、イエス様は、その事実をもって私達を「兄弟」と呼び、「友」と呼んで下さる。本当にありがたいことである。

70

「偽善な法律学者パリサイ人たちよ。

あなたがたは、わざわいである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはいらないし、はいるうとする人をはいらせもない。」

(マタイ福音書 23章13節)

義人はいない、ひとりもない。善を行う者はいない、ひとりもない。(ロマ3・10)

善をしようとする思いはあるが、わたしはそれをする事ができない。なんとみじめな自分であることか。(ロマ7・15-20)

よくよく自分をふりかえると、いつもいつも自分の利益や名誉のことばかり考えている。ああ、なんとみじめな自分であることか。(法然)

正直に自分の生きている心のうちを、のぞき込む時、欲のこころ、腹立つこころ、愚かなところが、うずまいていて事実気づきます。ところが、この自分の姿には目をつむり、ふたをして、何くわぬ顔をして、すまして日々をすごしている。これが私達の本当の姿であります。

ところが、先にかかげたいくつかの言葉は、この本当の自分の姿を正直に告白しています。なぜ告白したのでしょうか。それは、告白するよりはかにかくすることも出来ないからです。そのような自分を正すことが全く出来ない自分のみじめさ、あさましさをよく知っていたからです。ところがこと、ここに至っても、自分の本当の姿を隠し、偽り、つくろっていい格好をしようとするのが偽善であります。イエス様は申されます。わたしが来たのは義人を招くためではなく、罪人を招くためである。(ルカ5・32) いい格好をするのが信仰者ではなく、自分のあさましさにもかかわらず、それゆえにこそ、救って下さる神の慈愛に生かされる者であることに覚めている者が、信仰者であります。

「偽善なる律法学者、パリサイ人よ。

あなたがたはわざわいである。

杯と皿との外側は清めるが、内側は

貧欲と放従とで満ちている。」

(マタイ福音書 23章25節)

イエス様は、人間が人間に対してもつ偽善を問題にされるのではない。イエス様が、わざわいだ、本当に困ったことだ」と嘆かれる当の偽善とは、神に対する偽善なのであります。

人に対する偽善は、神に対する畏れがないところにより生じるのです。

神に対して自分を優れ、勝れる者とするとき、神に対する畏れを人間は失う。そして、神に対する畏れを失うとき、人間は自己自身を失うのである。つまり、自分自身に対して人は偽善者となる。パウロはこの事実をはっきりと指摘する。

「義人はいない、ひとりもない。悟りのある人はいない、神を求める人はいない。すべての人は迷い出て、ことごとく無益なものになっている。善を行う者はいない。ひとりもない。彼らのどは、開いた墓であり、彼らは、その舌で人を欺き、彼らのくちびるには、まむの毒があり、彼らの口は、のろいと苦い言葉とで満ちている。彼らの足は、血を流すに速く、彼ら

の道には、破壊と悲惨とがある。そして、彼らは平和の道を知らない。彼らの目の前には、神に對する畏れがない。

(ロマ書 10節-18節)

最も大切なことは何か。それは人に対して偽善者であることを中止することではない。神に對して偽善者を止めることであります。神に對して偽善者を止めることは、偽善者たるを得ず、偽善者なるがゆえに愛し、涙して救い上げて下さる神のご慈愛に、目開かしめられて、そのご慈愛の中に生かされている自分の現在に気づくことであります。その姿こそが「イエスは主である」という告白であります。

72

「あなたがたはわざわいである。あなたがたは預言者の墓を建て、義人の碑を飾り立てて、こう言っている。『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたら、預言者の血を流すことに加わってはいなかったらう』と。

(マタイ福音書 23章29-30節)

人々は言う。

もし、わたしがイエス様の時代に生きていたら、イエス様を十字架などに、つけさすことに絶対に反対しただろう」と。

はたしてそうだろうか。現在イエス様を義人として飾り立てて、崇め祭り礼拝しつつ、そのように言うところの、その姿は、正に、イエスさまが「わざわいだ」と言つて、するどく偽善者として批判されるパリサイ人その者と全く同じ姿ではないだろうか。と思うとき、わたしたちは、自分の姿に、ドキンとするような一つの衝撃を感じるので。

ドキンとするような衝撃とは何なのでしようか。それは、イエス様を義人として飾り立てて崇め祭り、ただ礼拝することだけでは、イエス様に在って（イエス様を信じて）現在生きていくということにはならないのだ、と言うわたしの信仰者としての在り方に対する、深くするどい指摘こそ衝撃そのものです。

崇め、飾り立て、さんびするだけでは信仰生活ではありません、神を生き、キリストを生き、イエスを生きることこそ信仰生活なのであります。「生きるにも死ぬるにも、わたしの身によってキリストがあがめられる」（ピリピ 20）ような生き方こそ、イエスを現在に信ずる者なのです。故に、これを聖なる供えものとしてささげよと（ロマ 12・1）パウロは申します。イエス様を、ただありがたがって「かかえ込む」だけの生活を、信仰生活だと思ふことは、正に、イエス様が申される「偽善」以外のなにもでもありません。

「あわててはいけない。それは起らねばならないが、まだ終りではない。」

(マタイ福音書 24章6節)

「あわててはいけない」とイエスは、きつく誡められる。これは、わたしたちがくだす判断、推測、それが、たとえどのように正しく行われようと、それを信じ、受け入れ、追隨することと「あわててはいけない」と申されるのです。なぜなら、われわれのくだす判断は、必ず限りがあり、どのような意味に於ても決して絶対ではあり得ないからです。この人間の事実をわれわれは厳肅に受けとめておかねばなりません。一切の人間の愚行は、ここよりはじまるのであります。イエス様は、この人間のもつ限界をはっきりと見ていられるし、さらに、この限界を忘れ、これを正しとし、それに思慮なく追隨する人間の愚かをイエス様は知りつくされてい

る。

「それは起こらねばならない」と申される「それ」とは何か。それは「終りがある」と言うことです。この世界に終りがある。この世は、過ぎ去る。この確実性は、すでに大自然の個々の物、者に於て示され語られて止まることなく、わたしたちの眼下にあります。人には終りがある。この事実に対する自覚的な発見は、わたしたちの人生、生きることに於ての最大の

喝であります。

では、わたしたちにできることは何か。何もない。只、かすかに見える事実を知をはたらかせ。ひたすら黙して、イエス様の語る事実を事実として、信ずるよりほかないと申せます。それは、信の行であります。

74

「持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取りあげられるであらう。」

(マタイ福音書 25章29節)

「施し散らして、なお富を増す人があり、与えるべきものを惜しんで、かえって貧しくなる者がある。物惜しみしない者は富み、人を潤す者は、自分も潤される。」

(しんげん 11・24・25)

本当にその通りだと思う。施すところを持つ者は、自分も施され、潤すところを持つ者は、自分も潤され、与える者は、自分も与えられ、愛するところを持つ者は、自分も愛される。

イエス様は、「求めよ、さらば与えられん」と申されましたが、「求めよ」とは「下さい、下さい」と言うことではなく、自分の我がということをして、神の中へ自分を投げ込み与えることなのであります。自分を捨てる者は自分を得る(マタイ 8・34・35)のです。本当の学びとは、ただ知識を得ることではなく、自分をみがくこと、つまり自分をすりへらすことであり、その時、本当の修行となり学びとなるのであります。自分の身につくのは、この修行以外にないのであります。

私たちは、苦勞せずして得ようとしません。与えずして得ようとしません。ささげずして得ようとしません。求めずして与えられようとしません。これらはすべて 神様の道理からはずれていることです。

わたしたち人間は、この神様の道理にハッキリと目覚めていることが大切です。この道理は、わたしたちの一切の考え、思いに先立って厳然としてある事実であり、定めであります。イエス様は、この道理を自から道理として生きられたのです。キリストとは、この事実としての道理そのもののことであります。

「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたことは、すなわち、わたしにしたのである。」

(マタイ福音書 25章40節)

わたしたちはとても欲深いものです。目の欲、口の欲、耳の欲……全くきりがありません。正に人間は欲のかたまりであります。

わたしたちの欲の深さが、どれほどのものかという証拠は、欲深さをすてるならば、欲深さによって得られるよりも、より多くの欲を充たすことが出来ると分かれば、その欲深さをすてる、という欲をもっていることです。

考えてみると、このような欲深さが、人間の文化というものをつくり、積みあげてきたと申せます。

ひとは言うかも知れません。善への欲と悪への欲、罪への欲と正義への欲とを混同してはいけない。善や正義や美しいものへの欲は、それ自身よいではないかと。たしかにその通りです。しかし、どのような姿であれ欲であることはかわりません。

欲を去るものではありません。欲をすてるのでもありません。欲の向こう側に出て、そこに立

つこと、そのとき、その行いが、正義であるから、善であるから、美であるから、という理由など一切問うことなく、それを為し行う。そのような世界があるのです。

自分が救われるために信じるのではない。正しい人間になるために神を仰ぐのでもない。ただ、そうすることが自然だからそうするだけで、全くの他意はない。

イエス様は、その自然を説き、輝かせられるのです。

クリスチャンだから「いと小さきものに愛をそそぐ」のではない。ましてや「救われる」ためでもない。目的や理由や結果は問わない。ただそれが自然だからそう行うだけであります。

76

「なんのためにこんなむだ使いをするのか。

それを高く売って、貧しい人たちに施すことができたのに」

(マタイ福音書 26章8・9節)

「無用の用」という用がある。無駄のようでありながら、他のいづれより有効であり、価値なきようでありながら、他のいづれより価値ある。一見無用のことであるように思えても、きわめて有用であるといった類のことが世の中には多くあるものです。

世の常識家と呼ばれる連中には、この無用の用は理解できない。彼らには、無用は無用、有用は有用、それ以上の何ものでもないからである。彼らはきわめて計算だかく、合理的で、気が小さく、一見道徳的のように見えて、その実きわめて不道徳的であると申せます。

彼らは「……のために……をする」と何時も言う。目に見え、目的がなければ、何をするにも不安でしかたがないのです。

ひとりの女がイエス様に高価な香油を、何のおしげもなくふり注いだ。人々はそれを見て「無駄」「無駄」と言った。しかし、イエス様は「これほど素晴らしいことはない。このことは後の世まで語り伝えられる」と申された。何が後の世まで伝えられるのであろうか。それは「愛」である。愛は、自分を計算にいけない、ということだと思う。黙って咲く花のようです。見せようとも思わず、見られていることすら感じず、そのままを、そのままとして咲き、そして散ってゆく、全く自分がないから、咲く花は美しい。

イエス様は、自分の宝である（自分自身であるような）香油を、おしげもなくささげる女の中に、人間の最も美しい在るべき素直さを見られたのであります。この無用こそ、有用中の用であると申せます。しかし、常識家には、この用はわからない。

「一同が食事をしている時言われた。

特にあなたがたに言っておくが、あ

なたがたのうちひとり、わたしを

裏切ろうとしている。」

(マタイ福音書 26章21節)

イエス様を、銀貨三十枚で敵の手に渡したのはイスカリオテのユダであります。

ユダは、銀貨三十枚が欲しかったのではない。それは「行きがけのだちん」にしかすぎない。銀貨三十枚程度で、イエス様を敵の手に渡すほど、「小さな」ユダではありません。

ユダはローマ帝国主義に、剣をもって立ち向おうとする過激な愛国主義者であります。彼は、反ローマ運動の指導者と信じたイエス様に、自分をかけたのです。ところが、イエス様はユダが期待した行動は起されなかった。そればかりか、民衆のころろの中に向って愛を説き、愛を行^{きよ}うじ給うばかりであった。それはユダには弱々しく見え感じられ、愛を説き愛を行^{きよ}うじることとのみ終始されるイエス様に、ユダは失望し落胆するに至ったことが極まった時、イエス様は、もはやユダには無縁、無用の存在となってしまうのです。つまり「イエス様が、どのようになろうと、わたしには全く関係ない。」と思ひ込む。その結果、行きがけのだちんとして敵

の手にイエス様を渡して、銀価三十枚を受けとったのです。

わたしたちは、このユダのころのう・つ・り・か・わ・りの中に、人間のエゴイズムの恐ろしさをみる事が出来ます。

人が主義、主張をもてばもつほど、それに執われ、そのエゴイズムは強く大きくなると申せます。

それに反して、イエスさまは、エゴイズムを越えたところから、裏切るユダに語りかけられ、それを止めようとはなさらなかった。イエス様は愛という主義や主張をされたのではない。人が在るべき自然キリストを生きられたのであります。

78

「ペテロはイエスに答えて言った。

「たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」

(マタイ福音書 26章33節)

「わたしは、つまずきません」とペテロは、力みます。ペテロの信念は大そう強いようです。ところで、信念とは何なのでしょう。かたく信じているお・も・い、考・え・の・こ・と・で・す。では、誰

が、かたく信じているかという点、それは、ほかでもなく自分がかたく信じているのです。ですからペテロは、「わたしはつまづきません」と言うのです。

つまり、信念とは、わたしがわたしによりかかっていた念いです。

わたしが、わたしのみによりかかき行動することほど、一見強そうに見えて、その実弱いものではないのです。実はこういう考えは曲者くまものなのです。第一にそれは、我が強いあらわれです。

「わたしの考えは正しい」、「わたしの行動は間違いない」、「わたしは強い」、「わたしは……」、本当は「わたし」は、そんなに正しくないし、強くもないのです。正しそうに見え、強そうに思えるのは錯覚なのです。そんな「わたし」はどこにもないのです。そんな「わたし」が本当にあると思ひ込んで、「わたしが、わたしが」という人は、我が強い人であると申せません。

イエス様は、「今あなたが、見える」といい張るところにあなたの罪がある」（ヨハネ 9・41）と申されました。わたしは見える。実は、何も見えていないのです。にもかかわらず見えていると自分では思ひ込んでいる。錯覚をしている。

大切なことは、見えていない自分に気づくその自分に、自分をまかせ、ゆだねること、その自分に生きることです。その自分とはキリストのことです。

「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにはなく、みこころのままになさって下さい。」

(マタイ福音書 26章39節)

このイエス様の言葉を、イエス様のところに即して領解する者は、はなはだ少ない。

もしこれを、わたしは十字架にかかり死ぬことはいやです。しかし、神がそう望まれるなら、わたしは、それに従います。とイエス様が申されたと思うなら、未だイエス様のことを領解したとは言えません。この理解のしかたは、神の御意志に従うのが人間として正しい在り方なのだ、という、人がつくった正しいと思う在り方を理想化して、その在り方に自分も他人も、イエス様までも、しばらくあげてしまった信仰の結果にしかすぎません。

イエス様は「わたしは……と望むけれども、それを打ち消して神に従います。」と申されているのではなく、すでにイエス様は、はじめから、それを打ち消しておられ、打ち消した中で苦しいです。悲しいです、不安です。と申され、さらに、それを乗り越えて参ります。と申されているのです。

つまり、イエス様は、神の御愛の外に在って不安を覚え、悲しみを覚えて、神の愛の中に進み込むことによってその不安をのり超えようとされているのではなく、すでにイエス様は、神の愛の中におられ安心と平安でありつつ、不安を不安、悲しみを悲しみだと申しておられるのです。それはあたかも、母の愛情豊かな腕のうちにあって泣く赤子のような姿なのです。不安は安心のなかでの不安であり、平安の中での悲しみであります。それは、信仰があっても、身を切れば血が出て痛いと同じであります。耳あるものは、聞くべし。

80

「剣をとる者はみな、剣で滅びる。」

(マタイ福音書 26章52節)

もし、このイエス様の言葉を、「剣をとる者は、相手も剣をもって挑んで来るゆえに、相戦う結果必ず殺されるであろう。」と、イエス様が申されたのだと解するなら、未だ、このイエス様の言葉を聞いたことになりません。

このイエス様の言葉は、とてつもなく重い。

この言葉そのものが、さながら類いまれなる名刀となつて、わたしたちの我が中心にふりおろされ、するどく切りつけて来る。正に、この言葉こそ、私たちの我を一刀のもとに成敗して

しまし、するどさをもっています。

もし、このイエス様の言葉の重さが領解できなければ、この言葉を自から幾度も幾度も、口ずさみ、黙想し、さらに黙想しつつ幾度も幾度も口ずさんでみるがよいでしょう。そうするとき、この言葉のもつ真底が開け、おおわれているところが明らかとなって来るでしょう。その時、頭ではなく身体で読めるようになり、やがて、この言葉が己れの我を、一刀のもとに成敗するにちがいありません。

「剣をもつもの」とは誰れであるか。ほかでもなく、この私なのです。

「剣」とは何か。ほかでもなく、わたしの「我」であります。他人を殺し、自分をも殺す。「我」が一切が生じる。盗み、殺人……」（マルコ 7・20）

使徒パウロは、あらゆるところで「剣をおさめよ」と説いている。（テモテエ 6・3／12）ヤコブは剣をもつ者の姿を説き（ヤコブ 1・14／16）パウロも同様にそれを説いている。

（ロマ 3・9／18）

しかし最後に弟子は、イエスをすてて逃げ去った。（マタイ 26・56）

「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました。しかし彼らは言った。

それは、われわれの知ったことか。自分で始

末するがよい。」

(マタイ福音書 27章4節)

ペテロもユダも、イエス様を見捨ててしまった、ということに於ては同じです。

ペテロは申します。「そんな人は知らない」「その人のことは何も知らない」と。(マタイ 26・72・74) ユダだけが裏切ったのではないのだ。ということをお忘れはなりません。否、ユダもペテロも、他のすべての人々、わたしもあなたも裏切ったし、裏切っている、ということの凄(すさまじ)い人間の現実を見すえなければならぬ。評論的、観念的、客観的に見すえるのではない。自分の身体で見すえるのだ。そのとき、何とも言えない悲しみが、おもいの底からこみあげてくる。「すみません。すみません。すみません。」という言葉となって、口に出で、ただ手を合す。

ペテロは「激しく泣いた」(75)しかし、ペテロは、自分の勇気のなさを悔いて泣いたのではない。「わたしを三度知らないと、お前は言うよ」と申されたイエスの言葉を思い出して、

「泣いた」のです。

すでにペテロの心底を見、知りぬいて、そのペテロをすでに抱きかかえていたイエスの愛を身に知って、そのイエスの愛の中で泣いたのです。もはや、ペテロには「自分」はない。イエス様の愛のみがある。泣いているのはペテロでなく、イエス様の愛が泣いているのです。

しかるに、ユダは、いつまでも自分自身に止まって悔い、悲しみ、泣いた。どうもできない自分を、なおも自分で始末しようとした。

人間は、自分で自分自身を始末することはだれにも出来ない。始末するのは、ただ神のみである。

82

「彼らはイエスの顔につばきをかけ、こぶしで打ち、

またある人は手の平でたたいて言った。『キリスト

よ、言いあててみよ、打ったのはだれか』

(マタイ福音書 26章67・68節)

病気を治す。金もうけをさせてくれる。わからないことを言いあてる。死んでからごくらく(天国)へ導いてくれる。………さまままな人間の願いごとをかなえてくれる。それが

宗教だと思ひ込んでゐる人々は多い。

事実、世間には、人間のさまざまの欲をかなえてあげます。というかんばんをかかけて、店開きをしている宗教といわれるものが多くあり、それに多くの人々がむらがついていく。

幸福になりたい、ゆたかになりたい、という人間の欲を、たくみにあやつって、大きな集団となつた宗教といわれる団体が、今日の日本にくつかある。それらは互に、もっと大きくなるうとして、信者といわれる人々を、これまた、たくみにつかして、政治の世界にまでおどり出て競ひあつてゐる。

求むる方も欲ならば、与える方も欲。全く欲のかたまりの集団が「○○神」「○○仏」「○○命」「教祖様」………というように、あたかも「一切が聖く正しく誠なるもの」となつてしまふのだから、全く不思議なことである。正にこれこそ、現代の最大の魔術である。

こんな宗教や信者がいくら多くなつても、人間の世界に、眞の幸福は来るはずがない。なぜならそれらは結局、欲のかたまりの集団だからです。

金持ちになりたい。出世したい。健康でありたい。ごくらくに行きたい。……したい。……：になりたい。こんな欲の固まりを持った人間は最後に、相互につかみ合いのけんかをはじめにちがいない。

イエス様を十字架にかけて殺したのは「言いあててみよ」と言つた程度の宗教信者だつたの

であることを忘れてはなりません。

83

「しかし、総督が非常に不思議に思ったほどに、イエスは何を言われても、ひと言もお答えにならなかつた。」

(マタイ福音書 27章14節)

世の中には、とても困った人がいる。それは「あざける者」です。「あざける者」とは旧約聖書の箴言によると、高ぶりおごる者を「あざける者」となづける”(21・24)とあるごとく、自分の考えを絶対正しいとして、他の意見を馬鹿にして受け入れず、耳をかたむけようとしない者です。たとえば、何か深い思想性のある意見を持って、自分の考えに固執しているように聞こえるが、そうではなくて、深い考えもなく自分の意見に固執する人のことを、「あざけるもの」といっているのです。それゆえに、このような人は、高慢無礼な行いを平気でするのです。(箴言21・24) 無礼を平気で行う人は無知の人です。このような人は正に、「箸にも棒にもかからぬ」人であって、何も言わぬがよいと言えます。なぜならば、語られし言葉は、聞く耳あつてこそ言葉として生きるからです。

イエス様は申されました。「聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるであろう。」(マタイ7・6)と。

イエス様が黙ってしまわれるとき、それは、多くの言葉を語る以上に語りかけ、うったえかけ、いつくしみを与えられているのです。

ひとの沈黙のなかに語られている言葉を聞きとる者こそ、本当に聞く耳をもつものであると申せます。

説いて教えることも大切であります。しかし、聞いて受けとることはもっと大切であり、さらに、沈黙を聞くことは最も大切なことです。

今、己れの耳に、そっと手をやってみる。

84

「わが神、わが神、どうしてわたしを

お見捨てになつたのですか。」

(マタイ福音書 27章46節)

あの信仰深いイエス様が、このような不信仰な言葉を口になさることはない。と思ひ込んで

いるところに、そもそも問題があるのです。

信仰があれば苦しいことも苦しくなくなり、痛いことも痛くなくなり、痒いことも痒くなくなってしまうのだ、と思つてはなりません。

信仰があつてもなくても、痛いものは痛いのです。悲しいものは悲しく、うれしいことはうれしく、痒いことは痒いのです。

痛いという現象は信仰とは全く関係ありません。

信仰があつて「痛い、苦しい……」と言ふことは、何か不信仰のように思い、恥のように思ひ込んでゐるなら、未だその人は信仰の何たるかを領解体得していない人なのであります。

最も肝要で大切なことは何か。それは「わたし」「自分」という立場から「痛い、痛い……」と言つてゐるのか。それとも、「自分を超え、わたしを超えたところ」つまり「神の愛、永遠の生命」の中で、「痛い、痛い……」と言つてゐるのか、ということです。このところは、イエスを本當に知るか否かの重要な一点です。このところを誤つて領解するならば、イエス様の言葉、行動その全てを正しく得ることができなくなるのです。

イエス様は何時、如何なる時も、「わたし」「自分」という自我の立場からでなく、「神の愛、永遠の生命」の中に在つて語り、行為していられるのです。

パウロは、このような生を「われ生くるにあらず、キリストわが内にありて生く」とも言つ

たのです。耳あるものは、とくときくべし。

85

「イエスは死人の中からよみがえられた。」

(マタイ福音書 28章7節)

十字架でおなくなりになったイエス様が、三日の後に墓の中から生きかえり天にのぼられた、という現象にのみ目を向けるならば、わたしたちはイエス様の復活ということについて、とんでもない間違いをしてしまうことになります。

イエス様がよみがえられたか、よみがえられなかったか。または、わたしたちも死んだ後よみがえるか、よみがえらないか、といった論議ほどつまらないことはありません。

よみがえるから、こう生きよう。よみがえらないから、こう生きよう。と人はこう考えるでしょう。

よみがえるということに執着した信仰も、よみがえることはないということに執着した生き方も、しよせんはとらわれの生き方なのであります。

イエス様があるとき次のようなことを申されました。

「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は死んでも生きる。また、生き

ていて信じる者は、いつまでも死なない。」(ヨハネ 11・25・26)

イエス様が申されている言葉は「わたしはやがてよみがえるであろう……」と言ってはおられません。

この言葉はとても重要なことを語り示していられます。つまり、イエス様は、生きていながら生きていることを超えて生きている。つまり生死がある生を超えて生を生きていられる。この生のさまを「わたしはよみがえりである。」「わたしは命である。」と申されたのです。

イエス様の、復活という出来ごと(現象)の意味するところはここにあるのです。ですからこの命が「世の終りまで、いつもあなたがたと共にある」(28・20)と示されたのです。耳あるものは聞くべし。

あとがき

普通には「信じる」の反対語は「疑う」だと思われています。たしかに、そのとおりだと言えますが、それ故に「信仰」の反対は「疑う」だと考えることは正しいとは言えません。

信仰とは素直なことです。素直とは無地そのまま、生地きじそのまま真白く、うそいつわりのないことであって、言うならば、人間の自我が突きぬけられてしまったところのことです。

では、自我が突きぬけられてしまったところに至るためには、どうすればよいのでしょうか。そのためには「疑う」ことです。いたずらに信じないで（コリント第一、15・1）疑うことが大切です。いたずらに信じるとは、無意味な行為のことで、盲信とか狂信のことでもあります。

「疑う」ということが、「なぜなのだろうか」、「どうしてだろうか」ということであるならば、その場合の「疑う」とは「問う」ことであると申せます。そして、そのような「問う」行為は、ほかでもなく願ひ「求める」行為でもあるのです。（マタイ7・7）

さて、右のように「疑」とは「問」であり、「問」とは「求」であるならば、この一すじの道こそ求道修行の道なのであります。そして求道修行の道は自己研鑽の道であって、自我をけ

ずり、研みいてゆく「滅」であり、その道はついに自己が神の愛につつまれて在るといふ自己の存在の事実と神の恵みの現実について「覚める」ことに至るのです。かくして「覚めた」ことにうながされて真なる神を信じることを「信知」というのであります。

従って、先の「疑」「問」「求」はさらに、「求める」とは自我を「滅する」ことであり、自我を「滅する」とは神の愛とその愛の中にある自己自身に「覚める」ことであり、「覚める」とは「知る」ことであり、それにうながされて神への「信」が生まれてくるのです。そして、そこに現成した信仰はもはや「信」のみの信仰でなく、また「知」のみの信仰でもなく、それは「信知」の信仰なのであります。(ピリピ3・8-12) それ故に、信仰とは「疑」であり「疑」とは「問」であり、「問」とは「求」であり、「求」とは「滅」であり、さらに「滅」とは「覚」であり「覚」とは「信知」であり、「信知」こそ信仰なのであります。(ヨハネ第一、1-3)

結局、素直な信仰、即ち自我をつき抜けたところに至る道は、以上のような自己研鑽の修行の道すじを通してついに自我を貧しくさせられるとき、自己の足下に既にあった神のめぐみに開眼させられるのであります。イエス様が「こころの貧しい人たちは神の支配(天国)を得る」(マタイ5・3) または、「自分を捨てる(自我を滅する)者は命を得る」(マタイ16・24)と申される故えんであります。

それにしても、信仰者はしばしば「疑」とは「罪」であり、悪魔の誘惑であると思い、そのような思いをひたすら否定し払いのけ全く「疑」がなく、ただ「信」のみあることを信仰者の理想とします。しかし、その努力は自我が作り上げた理想の自我に至るための努力であって、しょせんは自我内のことであります。つまり、それは自我がつくった理想の自我を実現しようとする強力な自我実現・自我主張のなにもでもありません。そこでは自我は少しも突きぬけられてはいません。大切なことは自我を突きぬけたところに立つことなのです。そこに立つとき自我をつつみ支えている神の愛に開眼し自覚めしめられ、真の平安の世界が現成して来るのであります。パウロはこれを「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られたのである。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」(コリント第二、5・7)と言ひ、さらに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。(ガラテヤ2・20)と、神にある生命の根源を共有することによって、生も死も一つとされている事実深い信知でもって生かされていることを語り示しています。つまり、ここでは自我は突きぬけられ、自己が自我によるのではなく、自己が神の永遠の命の働きにおいて働いているということを確実に信知しているのです。さらにパウロは、この命の事実について、キリスト・イエスの死と復活にあづかる洗礼の秘義

を語るくだりで「キリストは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことを知っている。……このようにあなたがたも、罪（自我）に対して死んだものであり、キリスト・イエスの中で神に生きていることを、認むべきである」（ロマ 6・4-11）と申しています。

わたしたちは、いたずらに信じる盲信狂信でなく、また、いたずらに知識という肉をたのみとするでもなく、ただ、信知によって正しく「門をたたく」者として求道修行の道を歩み、ついに神さまの命たぎる明るみの世界におどり出ることによって、この世をすっかりと生かさねたいものだと思えます。